

論文評価レポート	
評価者	木村研一
更新日	2013/12/7
研究デザイン	RCT
フルテキストへのリンク	http://iospress.metapress.com/content/a66k78362vr52i45/?genre=article&isn=1053-8127&volume=25&issue=4&spage=285
タイトル	Effectiveness of dry needling for the treatment of temporomandibular myofascial pain: A double-blind, randomized, placebo controlled study
著者	Dıraçoğlu D, Vural M, Karan A, Aksoy C
書誌	Journal of Back and Musculoskeletal Rehabilitation 2012; 25: 285-90. PMID: 23220812

構造化抄録	
目的	顎関節痛に対するトリガーポイント鍼治療の効果を検討すること。
症状・疾患	顎関節痛
セッティング	大学病院内の歯科、精神科、形成外科、小児科の医師で構成される顎関節症のユニット
参加者	顎関節症患者102名のうち、除外基準をクリアした52名
介入	
Arm1	真鍼(point-specific dry needling):
Arm2	偽鍼(non-point specific superficial needling)
主なアウトカム評価項目	<ul style="list-style-type: none"> 自動運動で開口させたときに顎関節に痛みが生じるまでの距離(mm) 圧痛閾値(kg/cm²) VAS(0-全く痛み無し、10-今まで経験した中で最も強い痛み)(cm)
主な結果	顎関節痛に対するトリガーポイント鍼治療の効果をランダム化比較試験を用いて検討したところ、治療前と治療1週間後とで比較した結果、鍼群、偽鍼群で圧痛閾値やVAS値は有意な改善が認められた(P < 0.01)。しかし、開口させたときに顎関節に痛みが生じるまでの距離は両群でともに改善しなかった(鍼群: P=0.255、偽鍼群: P=0.679)。また、鍼群と偽鍼群の群間比較では、鍼群で圧痛閾値が有意に改善した(鍼群: 3.21 ± 1.06 vs. 偽鍼群: 2.75 ± 0.35, P < 0.001)が、VAS値は群間で有意差を認めなかった(P= 0.478)。
結論	トリガーポイント鍼治療は顎関節痛の圧痛の緩和に有効な治療法である。
有害事象記載の有無	無し
利益相反の有無	無し
コメント	本研究は咬筋や側頭部のトリガーポイントへの鍼治療が顎関節痛を緩和するという結果をRCTを用いて示した最初の研究であり、臨床で意義深いと思われる。問題点として例数が50名と少ないことや、マスクの成否が報告されていないこと、鍼治療の刺鍼点の数や部位についても患者間で異なること、フォローアップについても治療一週間後の結果のみであることが挙げられる。さらに結果については偽鍼群でも痛みのスケールであるVASの有意な改善を認め、両群間で有意差を認めなかった。この点について、著者は偽鍼においてVASが軽減した理由として偽鍼によるプラセボ効果の関与を示唆している。今後は結論で著者自身が述べているように、より長期のフォローアップとより多くの例数によるRCTが必要であると思われる。

介入の詳細	
鍼治療の理論・方式	
鍼治療の方式	トリガーポイント鍼治療
治療の個別化	有り
理論の根拠となった文献などの情報源	文献13
刺鍼の詳細	
使用した刺鍼点	Arm1: 咬筋と側頭筋の複数のトリガーポイント
刺鍼した鍼の本数	不明
刺入深度	Arm1: 鍼管の長さ Arm2: 皮下組織までの深さ
意図して誘発させた反応	なし
鍼刺激の方法	一定の時間内で3回～5回、刺鍼した。
置鍼時間	置鍼ではない。
使用鍼の種類	ステンレス鍼(太さ0.22mm×長さ30mm)
治療計画	
治療回数	3回
治療頻度	7日に一回
治療期間	3週
補助的介入	
鍼以外に用いた介入	なし
鍼治療者の経歴	
訓練期間	不明
臨床歴の長さ	不明
対象とする健康状態に対する専門性	不明
コントロール群	
コントロール介入の方法	偽鍼
偽鍼の詳細	咬筋と側頭筋のトリガーポイントから離れた領域に皮下までの刺鍼を行う。
その他	
その他、全ての治療（共介入）の詳細	なし

RCTチェック	
割り振りに用いた乱数 (random sequence) の作成は適切か	適切
ランダム割り振りは遮蔽 (concealment) されているか	されていない
治療者の経験やスキルが各群で差が出ないように適切に考慮されているか	されている
参加者 (被検者、患者) は適切にマスクされているか	されている
治療者は適切にマスクされているか	されていない
アウトカム評価者は適切にマスクされているか	されている
アウトカム評価者が適切にマスクされていない場合、確認バイアスを避ける何らかの方策が用いられているか	不明
マスクの成功 (credibility) は報告されているか	されていない
介入以外の他の治療 (共介入) は各群において等しいか	他の治療は行っていない。
フォローアップまでの脱落や欠測について、群間に差があるか	ない。各群1名ずつ2名脱落。
鍼灸治療経験の有無について、群間に差があるか	不明
フォローアップのスケジュールは各群で同じか	同じ
主要なアウトカムはITTの原則に従って適切に解析されているか	されていない
サンプルサイズは事前に計算されているか	されていない。
参加者の背景因子が適切に報告されているか	されている
被検者登録から解析にいたるまでの期間における被検者数の状況がフローチャートとして報告されているか	されている